
鼠径部に硬性下疳を生じた第1期梅毒の1例

矢野 翔也、大塚 俊宏、谷崎 英昭、黒川 晃夫、森脇 真一
(大阪医科大学附属病院 皮膚科)

症例は49歳、男性。初診1カ月前より、右鼠径部に暗赤色紅斑が出現した。初診1週間前、近医にて副腎皮質ステロイド薬と抗生物質を外用するも改善しなかったため、精査加療目的で当科紹介となった。初診時、右鼠径部に潰瘍を伴う4×3 cm大の暗赤色局面がみられた。その中枢側に10 cm大のリンパ節腫脹が認められた。血液検査にて梅毒定性検査陽性、CRPは上昇、可溶性IL-2レセプターは1200であった。組織学的には、真皮内に形質細胞主体の炎症細胞浸潤が認められ異型性の強い細胞はみられずリンパ腫は否定的であった。風俗店で性的接触があり、詳細な梅毒検査を施行したところ、梅毒RPR 71.5R.U.、梅毒TP 17.11S/CO、FTA-ABS IgM 陽性であった。以上より本症例を第一期梅毒、性器外硬性下疳と診断した。39日間アモキシシリン 1500mg/dayを投与し、右鼠径部の紅色局面は暗紫色になり、第89病日には色素沈着を残して消退し、その頭側のリンパ節腫脹も消退した。陰部外に生じる硬性下疳は口腔内、口唇が多いが鼠径部に生じる症例も報告されている。